

## 主役として娯楽の舞台に登場する女性たち

『中国の娯楽とジェンダー』書評



胡勝

本書「はじめに」(大濱慶子氏)に述べられている通り、娯楽は学業や労働などと対置され、余暇を使い、私的領域と深く結びついている活動である。ジェンダー研究は一貫して「私的領域」に注目してきたが、ジェンダーの視座から中国の娯楽を読み解いた専門書はまだ見当たらない。本書は娯楽に焦点を当て、女性が構築する女性文化を「歴史の地表に浮かび出」(戴錦華、孟悦『浮出歴史地表：現代婦女文学研究』1989)させた意欲的な一冊と言えるだろう。

本書の研究対象の多くは、「オールド上海」と言われる20世紀初期の国際都市・上海を背景にしている。中国伝統演劇から発展した越劇や、舶来の映画、ラジオ放送、レビューなど、異なる風土で形作られた娯楽が上海で出会って開花した。異文化がせめぎ合う中、何よりも、娯楽の近代化に伴って女性が表舞台に登場し、主役として人の注目を浴びるようになったことが目覚ましい現象であった。しかし、これまでの上海の娯楽への研究は男性の主導し消費する娯楽を対象とし、女性を取り上げていても、客体として論じることが多かった。もしジェンダーの視座から娯楽を研究できれば、これまで周縁化されかつ不可視されてきたことを掘り下げることができるのではないか。こうした問題提起のもと、中国ジェンダー研究会は多様な手法を借り、複数言語の一次資料を使い、娯楽のさまざまな側面に対し細緻な研究を行った。娯楽の生産と消費に参加した女性たちは、単に見られ、欲望され、消費されたのではなく、ジェンダー規範に挑戦し、表現者として道を開いた主体であることが、本書を通じて明らかになってくる。

20世紀初期の中国の娯楽と言えば、まず目をひくのは男装という現象だろう。第一章「男装するモダンガール——映画『化身姑娘』シリーズと女性観客」で、菅原慶乃氏はスーザン・マンの「女性のファッションは政治的パフォーマンスの場であり続けた」という指摘を借り、1930年代上海のモダンガールたちの間で流行っていた

男装ブームに含まれる思想を分析した。男装はまず家長制社会が強要する女性の「規範」から逸脱する欲望として解釈できる。さらに、論者は女性向けの総合雑誌『玲瓏』を通じ、これまでの映画史研究で周縁化されてきた女性観客を可視化し、女性によって構築される映画文化の存在を指摘した。雑誌を通じて男装する女優と女性観客の間の同性愛的なクィアな連帯も浮き彫りにした。

男装して表舞台に上がったのは映画女優に限らない。中山文氏は第九章「姉妹の越劇——姚水娟・袁雪芬・尹桂芳の時代」で、「女優だけで演じる」を特徴とする越劇の歴史と特徴を考察した。越劇の書き手は京劇作品『香妃恨』や魯迅作品『祝福』などの物語を書き直し、ヒロインに主体的な行動を加え、「男が語る女の物語」を「女が語る女の物語」として生まれ変わらせてきた。通俗的な女性の娯楽として女性観客に受け入れられる越劇は、結果的に女性の社会的意識を向上させる役割を果たした。「女小生」(女優が演じる若い男性)が演じる異性愛は女性観客を魅了させる現象も興味深い。また、第十章「晋劇史上初の「女老生」——丁果仙の形象とその影響」で、陳鳳氏は1920年代後半に、山西省の地方芝居である晋劇の舞台に最初に登場した「女老生」(女性が演じる中高年の男性役)丁果仙の人生を振り返った。丁果仙は生計を立てるために小さいながらも必死に稽古し、男性が独占してきた晋劇の舞台に上がった。有名になってからも技芸を磨き続け、観客からの意見を積極的に取り入れ、独自の特色を作り出した。女性が男性を演じる前例が皆無であった時代に困難を乗り越えて、意欲的に技芸を鍛えた丁果仙の姿は、生き生きと行間から浮かび上がる。

舞台で男装して登場する女性は自由思想やジェンダー規範への抵抗として解釈できる一方、露出度の高い身体で登場し、娯楽の対象として消費された女性たちはどのように主体的な表現を獲得してきたのか。第七章「上海の少女レビュー・ビジネスの隆盛と衰退——〈見られる〉性と身体表現」のなかで、星野幸代氏は1929年に創立した

明月歌舞団の歴史と、明月歌舞団出身の二人の女優、黎莉莉と徐来をとりあげて論じている。近代学校教育制度における体育の称揚と、映画の労働者役が女性の身体露出を正当化し、女優たちは男性観客の視覚的な欲望に添えて〈見られる〉性として表舞台上に登場した。しかし、さまざまな制約を受ける一方、女性はまた能動性を行使し、自分の身体を媒体として表現している。男装女装にかかわらず、女性たちは自ら表現の舞台を作り上げた。

雑誌という紙上の空間によって結びつけられた女性も「発信・享受する娯楽」に積極的に参加した。第四章「『近代婦女』——中国初の女性向けグラフ誌」で、江上幸子氏は中国女性グラフ誌の先駆『近代婦女』をとりあげ、その図像と文章を分析した。同誌に掲載された図像から、20世紀初期の中国の都市に住んでいた女性の活動と生活が読み取れ、それらは特に社会活動や職場に進出するようになった女性の姿を見せてくれる。これまでの中国の「女学生」に対する研究は、おもに教師や作家を輩出した女子高等師範学校の学生に注目してきたが、これらの図像は工芸専攻、理髪学校等々の職業学校の女学生や、会社職員、タイピスト、車掌など、多様な領域で働いた職業女性の様子を示している。さらに、五四時期が推奨する「近代家族」に内在する性別役割分業とそれがもたらした男女不平等を鋭く批判する文章や、階級解放と女性解放の関係を論じるものが見られる。それらの論説は今日に至っても依然として意義があり、非常に啓発的である。また、第五章「つながる女性たち——戦時期『上海婦女』を中心に」で、須藤瑞代氏は雑誌の誌面の内容に留まらず、雑誌『上海婦女』が行った祝賀会や座談会を手がかりに、雑誌によってつながる女性たちの姿に光を当て、集会のかたちで職業女性、女学生、主婦、女性起業家など、異なる職業と階層の女性の間で連帯が織りなされる様相を論じている。

「華洋雑居」と言われた20世紀初期の上海では、中国人女性に限らず、外国人女性も活躍していた。第二章「女性冒険家とラジオ放送——上海フランス租界のクロード・リヴィエール」で、井口淳子氏は冒険家、フランス語教員、興行主、放送局局長、著作家などの様々な職業を経験し、挑戦的で多彩な人生を送ったフランス人女性クロード・リヴィエールの人生を紹介した。彼女は夫を失った後、本名アリスを男性名のクロードと変え、第二の人生を始めた女性であった。1938年に上海の仏語放送局に着任し、ラジオという新たなメディアによって自ら「声」を発信し、

世界中の文化や出来事を上海の聴衆に積極的に紹介した。また、第三章「上海租界のフランス語新聞が報じた中国映画とスターたち」で、趙怡氏は上海のフランス語新聞『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』について、特に映画に関する記事を取りあげて論じている。同紙は草創期の中国映画に関心を寄せ、質の高い図版付きの記事を掲載し、中国の人気女優たちに関する記事も多く見られる。フランス人女性記者はまた底辺で生きる女性や苦力に温かいまなざしを注いで記事を書き、中国の人々に寄り添う姿勢がその文章から読み取れる。第八章「上海の白系ロシア人詩人・ダンサー、ラリーサ・アンデルセンの半生」で、須佐多恵氏はその芸術的才能を駆使し生き延びた白系ロシア人ラリーサの生涯を紹介した。彼女は裕福な家庭に生まれたが、ロシア十月革命後中国に亡命し、文学を愛しながらも生計を立てるためにダンサーとなり、詩と舞踊を媒介として自分を表現しようと努力した女性である。オールド上海は中国人だけではなく、多国籍の人が流れ着く「魔都」であった。

本書はまた、国力強化と種の保存を動機として近代学校制度に組み込まれつつも女性の身体を鍛え、日常生活での自発的な娯楽となっていた女子スポーツ（游鑑明氏）、日本占領下北京の女学生たちが「帝国の修学旅行」で見出したささやかな楽しみ（杉本史子氏）、中国東北部の農村の住空間に設置された「小喇叭」（有線放送の小型スピーカー）聴取者の調査から浮かび上がる労働力のジェンダー（横山政子氏）、民国期に舞女が男性に提供するサービスであった社交ダンスから、労働者階級が人民服で男女同等に踊る交誼舞への変容（大濱慶子氏）、クリスマス行事など各種の集いを通じて中国の農村に心の安定や人格の錬成をもたらしたキリスト教の活動（石川照子氏）を取り上げて論じ、娯楽が持つ政治性や人格陶冶の局面、また様々な領域で果たした役割を明らかにした。

本書を読み、あらためて娯楽とジェンダーについて考えさせられた。余暇に当てられる、普段は大したことと思われない娯楽だが、実際には女性の社会進出と深く関わっている活動でもある。女性は〈見られる〉性と言われているが、本書は女性が公に〈見られる〉ようになることと引き換えに、表舞台上に上がるに至った過程に光を当て、「見られる」ことの背後にある主体性を掘り下げた。男性が独占していた舞台上に登場してきた女性は、すでに消費され欲望される客体を超え、自力で表現の場を創り上げ、表現の技芸を鍛えあげた主体となった。また、娯楽を媒介

として女性たちの連帯も強まり、さらにそこには女性文化が構築されていく。映画女優・女性観客・女性向けのクラブ誌の連動は一つの例である。そのような場で文化生産に参加する若い女性たちは、舞踊、映画、芝居、雑誌などさまざまな領域に進出して才能を開花させ、ともに「少女中国」(濱田麻矢『少女中国』2021)を築き上げた。その営みは彼女たちの人生を向上させただけでなく、後続の女性にとっても道を開き、勇気を与えたのではないか。本書を起点として、娯楽とジェンダーに関する研究は豊かで多角的な分析へと開かれ、さらに盛んになることだろう。